



変化に挑戦しよう



理事 谷 徹

社会福祉法が改正されます。法律が変わることですからそれは真剣に時間をかけて発布されてくるわけですが、聞こえてくるのは不平不満。昔は良かったという懐古主義者たちの呻きが聞こえます。

戦後70年、現行の法律が制定されてからも約70年。昭和、平成を彩ってきた生活や文化のランドマークであった「国立競技場」「青山劇場」「津田ホール」「五反田ゆうぼうと」「渋谷公会堂」「横浜アリーナ」・・・宿泊施設ではバブルの塔と揶揄された「赤坂プリンスホテル」、外国の模倣をせず日本の特色を生かした本物のホテルと言われた「ホテルオークラ本館」。2016年問題と言われた直近に閉鎖されてしまった施設の数々。個人的に昭和39年10月10日生まれでこのピッチに立った経験のある自分としては「国立競技場」の取り壊しは自分のアイデンティティを失ってしまうぐらいの衝撃的事件でもありました。

我々の関わっている子ども達は卒園式を迎え、新しい自分たちの居場所へ旅立ちます。そこは今まで慣れ親しんだ保育園と違う場所です。また、毎日優しく見守ってくれていた先生達とも違う人たちがいます。成長していくと常に変化に遭遇します。子ども達はその後、中学校、高校、大学へと進学していくかもしれません。取り巻く環境すべてが変わっていくのだと思います。そのすべての変化に立ち向かいながら社会に出て、大人になっていくのだと思うのですが、大人になって（なっているはず？）仕事に就いて、社会人と言われる立場が長いほど変化に適應できなくなるのは何故でしょう。

仕事で壁にあたることは日常茶飯事。そのとき聞こえてくる

「私ってこういう人だからぁ・・・」とか

「僕はアナログ人間だからスマホなんて使わないよ」とか

「俺は誰よりも長くここにいてなんでも知っているんだから俺の言うことを聞いていればいい」とか

今の自分のスキルやこれまでの経験だけを肯定して全く新しいことに対応しようとししない。そういった社会人らしき人たちに遭遇すると、きっと何よりも自分のことだけが好きなんだなぁと思ってしまいます。

変わらないということは楽チンです。特に仕事に就き肅々とその仕事に打ち込んできた人にとって積み重ねた仕事観のようなものだけで乗り切れると思うのでしょうか。

しかし、これからは変化に対応していかなければ生きていけなくなるかもしれません。世の中は刻々と変化していきます。いつもそこにあり目印にしていた建物がなくなっていたりします。新しく建てるために多くの人に関わり、汗を流し、悔し涙を流すときもあるんです。

我々が関わる事業の法律が変わる時、それは既存のあり方を否定され、立法70年の積み重ねた英知を破壊されるものなのかもしれません。しかし多くの経験を持つ先人たちと、若いエネルギーを持つ保育者たちが本気で手を取り合い、経験を持つ先人は変わることを恐れず、若い者は経験を積むことを恐れず、共に取り巻く変化にチャレンジしていかなければ闘えません。今までも幾度となく変化があり乗り越えてきたはずです。保育者全員が変化に挑戦しなければならない時なのかもしれません。